

Pinnyo

動臨研 野生どうぶつ友の会ニュースレター Vol.13



放鳥後に追跡調査が可能だったコハクチョウ	1
コハクチョウの内部寄生虫調査	3
野鳥に関するアンケート調査のまとめ	4
野生鳥獣保護管理基金協力者&友の会メンバー	6

放鳥後に追跡調査が可能だったコハクチョウ

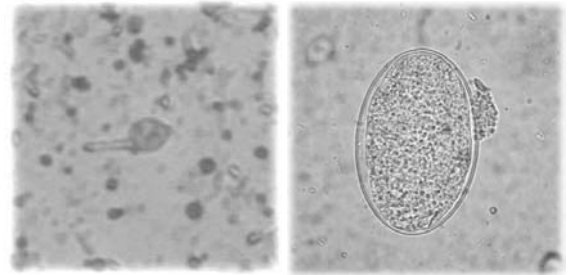
毛利 崇

コハクチョウは冬に日本に渡ってくる鳥で日本各地に越冬地があり、愛らしく美しい外貌と仕草から人々に愛され、手厚く保護されています。ロシアなどの北方で繁殖しており、1つのペアから3羽から5羽くらいのヒナが生まれ、ヒナが生後約3カ月で飛べるようになると、家族で群れを作って越冬地である日本へ渡ってきます。若鳥はグレーの羽毛に包まれて嘴もピンク～白色をしています。家族の絆は強く家族単位の群れを崩すことはありませんが、産まれて間もなく長い渡りに入るためにやはり衰弱して脱落する若鳥がいるようです。今回、そんな渡りの最中に家族の群れから脱落した若鳥を保護し治療し放鳥しましたが、その後米子水鳥公園の協力を得て野生復帰するまでの様子を観察することができましたのでここに紹介します。

2006年10月19日にコハクチョウの若鳥が衰弱して保護されてきました。羽根の色や体の大きさから生後3～4カ月で今年生まれて北から家族と一緒に渡ってきた個体と判断されました。外観上目立った外傷や骨折等は認められませんでした。体重は3.0kgしかなく、極度の栄養不良状態で下痢をしていました。一日安静にし、給餌をした後に各種検査を行いました。レントゲン撮影検査では特に異常を認めませんでしたが、糞便検査からジアルジアという原虫と回虫の卵が見つかりました。

衰弱のためにこれらの寄生虫が増殖したのか、寄生虫がいたために衰弱したのかは分かりませんが、これらを駆除することと

しました。駆除にはメトロニダゾールとイベルメクチンを用いました。投薬を続けて入院7日目には体重も3.6kgまで増加しました。下痢も止まって糞便検査でも寄生虫は認められなくなりましたので、米子水鳥公園にて放鳥することになりました。



ジアルジア (左) および回虫卵 (右)

傷病野生鳥獣の救護活動の問題点として、救護した野鳥が放鳥後にきちんと野生復帰できているのかモニターすることが困難であるという点があげられます。方法としては哺乳類であれば耳に標識をしたり、鳥であれば首輪や足輪をつけて標識したりテレメーターをつけたりという手法があります。ただし、首輪や足輪をする方法は健康な野鳥がどのような経路で渡りをするのかという国際的な研究に支障をきたす恐れがあるのでなかなか実施することが出来ません。その代替案として今回羽毛の染色によるマーキングを行いました。



白髪染めで頭部を染めたコハクチョウ若鳥

マーキングは頭部と尾部を人間用の白髪染めを用いて行いました。放鳥されたコハクチョウは池の上を泳いでいき、浮力も十分と思われました。

放鳥して4日目には群れと合流出来ずに水鳥公園内を歩き回る姿が目撃され、その夜には公園の道路上を歩いているところを発見され池に戻されました。



放鳥風景（米子水鳥公園）

11日目には他のコハクチョウがあまり近づかない公園の観察施設の前にて単独で休む姿が観察されました。飛翔しようと試みましたが50mほど助走して諦めたとのことでした。また、公園内に住む外来種であるコブハクチョウに追い立てられる場面も観察されました。

18日目には公園を数周飛翔する姿が観察されましたが、相変わらず単独で行動しており、群れに合流出来ていませんでした。

37日目には不完全ながら群れに合流し、昼間は群れについて安来平野に採食に出かけるようになりました。このころになると頭部の染色は目立たなくなってしまう、行動も他のコハクチョウと同様になってきたためにそれ以上の追跡調査は不可能となりましたが、野生復帰を果たすことが出来たと判断しました。



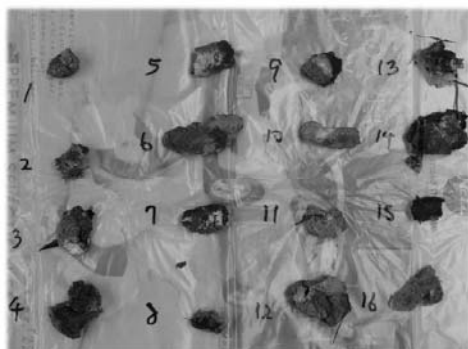
放鳥後35日目のコハクチョウ若鳥

今回保護されたコハクチョウの若鳥は人間社会の様々な活動の犠牲となった個体ではなく、自然の試練に打ち勝つことが出来なかった個体であり、本来は自然淘汰される個体であると思われます。傷病野生鳥獣保護の概念からすれば、この若鳥を救護すべきかどうかは議論の余地があります。寄生虫を持った鳥を救護して群れに戻すことによってその寄生虫を他の健康な鳥に伝染させる結果になる可能性があるからです。今回のコハクチョウについては放鳥前に寄生虫が駆除されていることは確かめましたが、群れが当初は若鳥を受け入れなかったことも、病気が疑われる個体は群れに迎えないという自然の防御機構が働いているのではないかと考えられました。

この若鳥の今後ですが、家族単位の群れからはぐれてしまった若鳥は「若鳥グループ」という同じ境遇のコハクチョウ達で新しい群れをつくってやがてはロシアに帰っていくそうです。今後識別することは難しそうですが、力強く成長して数年後には子供を連れて日本に飛来してきてくれればと願うばかりです。

コハクチョウの内部寄生虫調査

その後、このコハクチョウにみられたようなジアルジアや回虫が実際に野外で生活する個体群にどのくらいの割合で寄生しているのか、関係者の協力を得て調査を行いました。



安来平野で収集されたコハクチョウの糞便若鳥を放鳥して44日後に米子水鳥公園で回収された10検体、放鳥後82日後に安来平野で回収された16検体の合計26検体を直接法および浮遊法

によって検査しました。

その結果、26検体全てにおいて病原性のあると思われる寄生虫は認められませんでした。野外で暮らすコハクチョウ達には内部寄生虫が蔓延しているであろうと予想していたのですが、実際には寄生虫の罹患率は低いものでした。あるいは、通常の体力のあるコハクチョウではこれらの寄生虫に感染したとしても免疫力によって検出限界以下までその増殖を抑える力があるのかもしれません。

今回のコハクチョウの放鳥後の追跡および寄生虫の調査は米子水鳥公園の指導員の皆様のご協力によって実施できました。この場を借りて深謝いたします。



野鳥に関するアンケート調査のまとめ

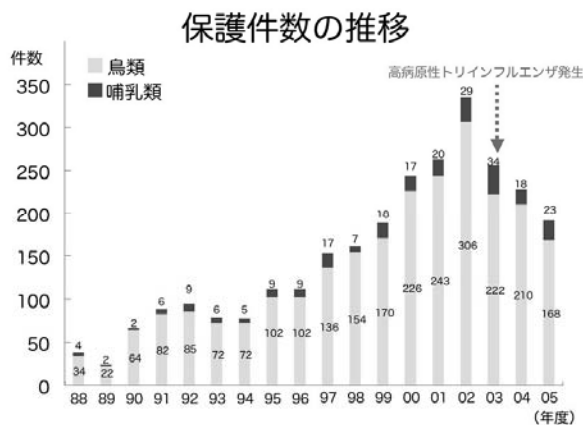
-高病原性鳥インフルエンザと関連して-

毛利 崇

2007年1月に宮崎県を発端として高病原性鳥インフルエンザ（H5N1株）の発生があり、岡山県でも発生が報告されました。数年前の流行時の経験から防除体制も整備されており、今回の流行はそれ程混乱が起きることもなく速やかに対処され、各地で一応の終息をみつつあります。マスコミの報道も以前の流行時のような過剰なものではなくてきているようです。しかしながら高病原性鳥インフルエンザについての人々の関心は薄れている一方で、その影響は傷病野生鳥獣保護には影を落としているように感じます。

ザの発生した2003年度から明らかな減少をみせています。

過去にも高病原性鳥インフルエンザの発生時には周囲の野鳥の感染状況の調査が行われてきましたが、発生農場からの二次感染と思われるもの以外は野鳥に高病原性鳥インフルエンザが流行している証拠は見つかりません。水禽類がこれらのインフルエンザの重要な運び手となっているのは疑う余地のない事実ですが、野生動物から高病原性鳥インフルエンザが直接人に感染する確率は非常に低いものであると言えるでしょう。



2004年1月から2月にかけて山口県、大分県、京都府で高病原性鳥インフルエンザが発生し、この際に盛んに野鳥との関連が繰り返し強調されて報道されました。これらの世間の風潮は野生動物救護活動に向かい風となったことは間違いなく、実際に財)鳥取県動物臨床医学研究所における救護件数の推移を見ると2002年度までは保護件数も順調に増加し、ピーク時には335件に達していますが、高病原性鳥インフルエン

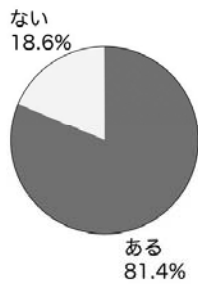
財)鳥取県動物臨床医学研究所では2004年の発生時には救護された野鳥から高病原性鳥インフルエンザが発生した場合、風評被害によって動物病院の機能が停止する怖れがあったために苦渋の選択でしたが、野鳥に限っては直接の搬入を停止し行政側でPCR検査を実施した後に正式に搬入される体制をとりました。

2007年の発生時には防疫体制も以前より強化され、世論も比較的冷静であることから通常の体制を維持しています。

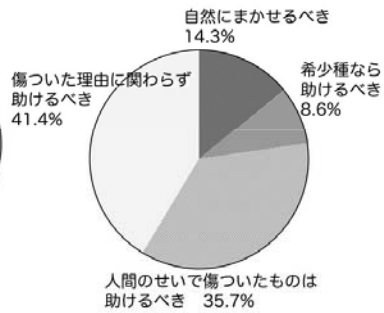
野鳥に関するアンケート調査

高病原性鳥インフルエンザに対する一般市民の意識を調査するために2006年12月1日から12月10日までに米子動物医療センターに来院した飼い主70名に協力いただいでアンケート調査を実施しました。

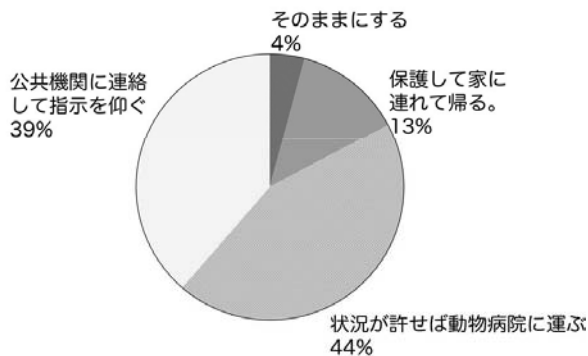
Q1.野生動物に対して興味がある方だと思うか？



Q2.傷ついた野生動物を発見した場合にどうするべきだと思うか？



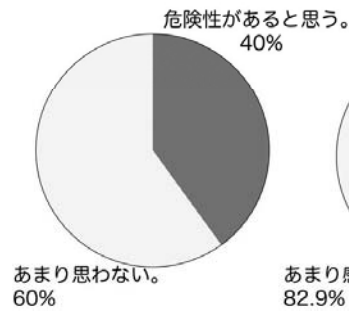
Q3.実際に傷ついた野生動物を発見した場合、あなたはどのように思うか？



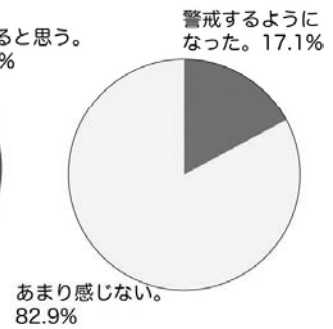
これらの人々は動物病院に伴侶動物を連れて来院することから比較的動物に好意的で、興味を持つ人々であると想像されます。実際に「野生動物に興味があるか」という問いに対しては81.6%の人が「興味がある」と回答しており、傷ついた野生動物を発見した場合には96%の人が何らかの形で救助を試みたいと回答しています。

しかしながら、「野鳥から高病原性鳥インフルエンザに感染する危険性があると思うか」との問いに対しては40%の人が「ある」と答え、「高病原性鳥インフルエンザの発生以後、野鳥を警戒するようになったか」との問いに対しては17.1%の人が「警戒するようになった」と回答しました。

Q4.野鳥に触れると鳥インフルエンザに感染する危険性があると思うか？

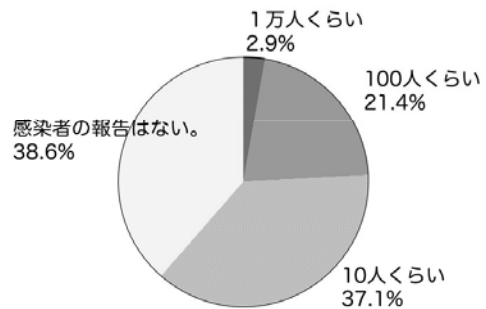


Q5.鳥インフルエンザが話題になった後、以前に比べて野鳥に警戒心を持つようになったか？



また、日本国内における高病原性鳥インフルエンザの人への感染者数についての質問に対しては正しい回答である「感染者の報告はない」は38.6%に過ぎず、「約10人」が37.1%、「約100人」が21.4%、「約10000人」が2.9%とでした。

Q6.日本国内に鳥インフルエンザに感染した人間は何人いると思うか？



これらの結果から、比較的動物とその病気に興味があると思われる人達においてすら、高病原性鳥インフルエンザに対する認識は不確かなものであり、野鳥から伝染する危険な感染症が蔓延しているというイメージがあるようです。これはかつての狂牛病の発生の際と同様に、危険性を警告する報道が繰り返された結果であると考えられ、この負のイメージが払拭されるには数年を要するものと思われます。

活動報告 財) 鳥取県動物臨床医学研究所卒後教育セミナー (九州)



スタッフセミナーの様子

2007年1月28日(日)に福岡市において毎年恒例である財)鳥取県動物臨床医学研究所卒後教育セミナーが獣医師と動物看護師を対象として行われました。今回はその中で野生動物の救護活動についての講演も行われ、財)鳥取県動物臨床医学研究所から獣医師の毛利が講師として出席しました。講義の後は野生動物救護に関する座談会が行われ、有意義なものとなりました。

平成18年9月1日から平成19年2月28日までに
野生鳥獣保護管理基金に下記の皆様(敬称略)より御協力頂きました
誠にありがとうございました

犬丸 憲之(福岡県)	武部 百合子(鳥取県)	ハワイ動物病院(鳥取県)	山根動物病院(鳥取県)
宇野動物病院(愛媛県)	田代 加奈江(東京都)	藤井 彩(鳥取県)	吉田 倭子(鳥取県)
笹間 晴美(鳥取県)	田中 浩子(岡山県)	ペットの病院カトウ (長崎県)	和田獣医科病院(京都府)
佐藤獣医科医院(大阪府)	ドリトル動物病院 (福岡県)	望月 和美(神奈川県)	第27回動物臨床医学会 年次大会募金箱
高島 一昭(鳥取県)	中島 考外(鳥取県)	矢田獣医科病院(石川県)	

野生どうぶつ友の会メンバーのご紹介 (アイウエオ順)

安部 まゆみ	久野 由博	清山 陽一	原 智己	望月 和美
荒木 正博	公納 國雅	高木 圭子	播口 恵理子	本好 茂一
石川 勝行	倉吉東高バレー ボール部女子	高島 一昭	坂東 眞由美	森岡 宏
石倉 久美子	鯉江 洋	高橋 貢	平中 和子	森島 隆司
石田 一子	小出 和欣	滝下 美智雄	廣瀬 孝男	八木 賢裕
石田 京子	上月 順子	武部 百合子	廣田 尚享	山木 幸枝
犬丸 憲之	河野 史郎	田代 加奈江	藤井 彩	安田 圭一郎
入江 則仁	小笹 信子	田中 京子	藤井 久恵	保田 修一
入江 美由紀	小谷 悦子	田中 浩子	藤井 寛子	矢田 新平
上野 喜美代	小林 定正	谷口 真一	藤井 洋子	山形 静夫
宇野 雄博	小林 恭子	谷本 幸子	藤田 公子	山口 正純
大上 幸子	小林 恭子	玉置 絵美	藤丸 京子	山崎 浩司
大西 利哉	斉藤 温子	塚根 悦子	船津 敏弘	山崎 智子
小椋 千代子	坂井 尚子	手島 良一	ペットの病院 カトウ	山下 節男
桶本 千春	酒本 勇	十亀 沙理	堀田 あゆみ	山下 茂
尾崎 佐和子	酒本 まさ子	徳山 亜希子	本江 キクコ	山下 祐子
尾崎 栄	笹間 晴美	仲市 素子	前田 かおり	山田 悌次
小原 摩耶	佐藤 正勝	中島 秀子	益田 和彦	山中 克子
片岡 智徳	佐藤 秀樹	中島 孝外	増田 富子	山根 剛
加藤 年子	佐藤 明美	中田 千佳夫	増田 裕子	山根 義久
門脇 好登	柴崎 文男	中谷 孝	松井 加津代	山根動物病院
神谷 好美	柴崎 哲	仲庭 茂樹	松田 歩美	山村 穂積
神谷 政志	下田 哲也	中原 公彦	松本 富美代	山本 和美
神谷 要	城下 幸仁	中村 琴美	松本 英樹	吉田 倭子
亀尾 有美子	菅原 みどり	西田 龍之介	三浦 綾子	吉本 留美子
川合 亜樹	杉本 寿彦	野口 敬紀	三嶋 京子	米原 善隆
川上 俊肅	杉本 輝幸	野中 雄一	三宅 ゆかり	綿貫 和彦
川上 真紀	杉谷 篤志	野山 順香	三好 由希子	和田 茂雄
川上 理恵	鈴木 愛瑠	野呂 浩介	ムーア 陽子	
木村 徹	鷺見 美由紀	華園 究		

《表紙の動物》



ヤマシギ(*Scolopax rusticola*)北海道から九州で繁殖し、北方に生息する個体は冬季は暖かい地方に移動します。チキ、チキ、ブー、ブーと鳴きながら飛びます。秋冬には人里の近くにも見られます。長い嘴でミミズなどを食べているとのこと。この個体は衰弱して運ばれてきましたが、治療に反応せず亡くなりました。他の鳥に比べて眼が後方についているのが珍しく、表紙を飾ることになりました。

編集部だより

Pinyo 第13号をお届けしました。今号では冬の風物詩であるコハクチョウを中心にお届けしました。コハクチョウ自体は生息数が増加中の鳥であり、ほかの種に比べて積極的な保護が必要とも言えないようですが、自然保護のシンボルのような面もあるようです。本文中でも述べましたが今回救護された若鳥は自然淘汰の対象となるような鳥であり、こういった鳥を自然復帰させることによってその背景にある正常な個体群を危険にさらす可能性があり議論の余地があるところ

です。九州セミナーにおいて各県で野生動物救護を行う獣医師達と情報交換をすることができましたが、例えば今回のコハクチョウの若鳥のような鳥を救護するべきかどうか、様々な意見がありました。救護に関する立場、考え方は多様であり、野生動物救護の難しさ、複雑さを感じると同時に様々な可能性を感じる機会となりました。

投稿・お問い合わせなどは……

(財)鳥取県動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会

〒682-0025 鳥取県倉吉市八屋 214-10

Tel 0858-26-0851 Fax 0858-26-2158

E-mail dorinken@apionet.or.jp

URL <http://www.d-wildlife.com>

ニュースレター「Pinyo」 Vol.13(2007年2月)

発行：(財)鳥取県動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会

編集：毛利 崇 挿絵：福田 信子